

アマダイ通信NO.69

(Tile fish network letter)

08年金木犀咲く

知人・友人各位

アメリカ発の金融危機があつという間に世界に波及、大恐慌以来の世界同時不況の到来かと、世界中を不安に陥れています。アメリカの過剰消費と、それに群がりバブルに狂ったその他大勢の当然のツケでしょうか？わかっているけど止められない！資本主義に代わる新しい社会システムを創り上げない限り、狂躁と失望を人類は繰り返すのでしょうか？

白神を狼特区に！？

旧七帝大の同窓会、学士会の会報に、「日本に狼を！」と、🐾と考えを同じくする人の論文が載り驚く。「日本オオカミ協会」もあるという。農耕民族の日本では「大神」として神社で祭られ、肉食獣として食物連鎖の頂点に位置する。田畑を踏み荒らし、木の芽や皮を食べる猿や鹿を捕食するからだ。中国語でも「良獣」の文字が当てられる。逆に牧畜国では家畜を襲う狼は駆除対象で、赤頭巾ちゃん等の物語でも悪役で登場する。

狼は家畜を襲っても人を襲うことは少ないが、明治維新後狩猟対象となり、疫病の流行もあり、百年前に絶滅した。狼が家畜化された犬は繁栄を謳歌、先祖の狼は滅んだ。食物連鎖の頂点に位置する狼が滅んだ結果生態系が崩れ、動物界と人間界のバランスも崩れた。全国的に熊、猿、鹿等が増え過ぎ、山林や田畑を荒らし、民家に入り込み、深刻な害を及ぼす。狩猟は険しい山に苦勞して入り、危険で、獲物をその場で解体して持ち帰る汚い仕事として今では「3K」の代表だ。する人も少ない。我が故郷白神でも「猿追い隊」を組織するが、猿知恵に勝てない。生態系を復元し、農林業の被害も防げる狼の復活は真剣に考慮すべきだ。当然、人間も襲われると反対する意見もある。ただ現在でも熊に人間が襲われる被害が後を絶たない(熊は人間に遭遇し、驚いて自己防衛しているだけだというだろうが)。狼を復活させることで、熊の害は大きく減り、飼い馴らされて犬になったことわかるように、狼が人間を襲うことも、余り考えられない。

犬を山奥に放し、野生化して先祖還りを図るという手もあるかも知れないが、外国から移入した方が早い。🐾も関わる、緑の地球ネットワークの黄土高原の植樹地の貯水池に、かって子狼が死んでいた。中国の狼なら遺伝子的にも日本狼に近いだろう。佐渡で再生が進むトキと同じように中国から狼を移入し、人間の立ち入りが禁止されている白神山地の保護区に放し、動物界の秩序と生態系の回復を図るのは如何なものであろう。

風涛と西域物語の中央アジアへ！・・・🐾の夏休みウズベキスタン日記

8月8日出発のウズベクツアーまで1月を切り、ニワカ勉強の準備をする。ウズベキスタン、中央アジア、シルクロードをキーワードに丸善の新書コーナーを探すが、収穫ゼロ。関係ない新書11冊をついで買いする。新宿の設計事務所への営業の帰途、紀伊国屋で検索。ウズベクでは出て来ず、中央アジアで何冊か。取り敢えず講談社学術文庫「文明の十字路口=中央アジアの歴史」と文庫クセジュ「現代中央アジア」の2冊買う。シルクロードブームも下火か？脳弱体強の🐾には歴史認識、世界認識を深めるいい機会だ。

今度こそ！と思ったメキシコ・キューバツアーは不成立。エッ？と思ったミャンマーと懸案の南アも催行中止。南アはジンバブエの難民や石油、食糧高で治安が悪化しているようだ。チベットも外国人受入再開の新聞記事を見て旅行社に連絡したが、まだ駄目。結局JTB 旅物語で、8月8日からウズベク8日間の旅をする。新疆、昨夏のイランに続くシルクロード第3弾。今回は娘に振られ、一人旅。繰返す栄枯盛衰、そこに暮らし続ける人々、資源高、食糧難の冷戦後グローバリズムの中で、シルクロードの民の行末は？資源高から資源枯渇が意識され、ドラスチックに構造変換が進む世界へ！気持ちは逸る。

8月7日夕方、お台場のサントリーに寮一年先輩の筑紫常務を訪ね、「大鋸屑パレット」の営業。翌朝8時過ぎ成田空港集合で旅立つというのに、新橋の美々卵でうどんスキで一杯、凍結酒を飲み過ぎる。翌朝4時に起こされ、慌てて荷作り。高田馬場へ出たら池袋で人身事故、山手線ストップ。急遽西武線に乗り直し、新宿から大江戸線で御徒町へ。日暮里からスカイライナーに乗るが、8時15分の集合に30分ほど遅れる。関空経由でタシケントまで11時間、何かハプニングの予感がする。中学時代貪り読んだ、井上靖の戦争とロマン、革命と恋の世界へ！気分は高揚する。

意外に緑濃い？オアシス都市タシケント

成田から関空経由でウズベキスタン（ウズベク人の国の意）の首都タシケントに、夕方5時過ぎ着。時差4時間。ウズベクツアーから帰国、成田経由で関空に帰る途中の、チェンジア・モロッコツアー仲間の岐阜の三橋さんと成田でバツタリ。関空で一度飛行機から降り、空港内を一周、再度、同じ機内へ。韓国、中国上空、広大なタクラマカン砂漠を飛び、天山山脈かパミール高原か、雪山を越える。不毛の荒地から荒磯に生えるイワノリの様に大地に緑が増え、それが短冊状の畑になり、緑が濃くなると、そこがウズベキスタンの首都、タシケント。オアシス都市。国内人口の10%程、230万人が住む中央アジアの中心都市だ。年に10回ほどしか雨が降らないと言うが、思いの外木々の緑は濃く、気温39度。草木の葉は埃を浴び、いささか疲れ気味だ。湿度が低いとは言え暑い。

ウズベク最初の食事はホテル。メインディッシュは鶏ステーキエビチリソース風。本当はこれも名物料理の蒸餃子だったらいいが、間違えて先着のツアーに出たらしい。中々の味でビール中ビン一本では足りない。白ワインを頼むが、赤はあるが白はない。ウオッカを頼む。SARBAST500mlが6500スム（10スム約1円）、1ショット3500スム。さすが旧ソ連圏だ、ウオッカが幅を利かせる。ホテルの部屋は広くバスタブもある。粘度色のお湯だが一風呂浴び爆睡。翌朝6時ホテル発、古都サマルカンドまで、ウズベクの最新幹線、特急列車レギスタン号で300キロ、4時間。朝食は弁当で中身は期待できない。前夜のお湯の色は気になるが、持参のポットで湯を沸かし、カップ麺に注ぐ。

レギスタン号車内、一等車の6人掛けコンパートメントで、朝自分で炒れたコーヒーで弁当のサンドイッチを頬張る。ヨチヨチ歩きの子供が近づく。可愛い！早速秘密兵器、富士フィルム製ポラロイドで撮る。次々に子供が、ファミリーが、女車掌が、撮れたての写真に歓声を挙げ、楽しい交流が始まる。車窓はジャガイモやトウモロコシの緑が広がり、南米原産の二つの作物の人類への貢献の大きさと南米のインディオの悲惨な歴史を想う。小麦畑は黄色く刈り取られ、集落の間隔が間遠に、緑が薄くなると山がみえ、パミール高原の端っこだという。単調な景色に眠り込む。ただと思ったお茶6人分が千スム（百円）

モスクは美しく、アザーンは聞こえず

ウズベキスタン第二の都市サマルカンド、古来シルクロードの要衝。多くの王朝が栄えては滅び、建設されては破壊された街。ジンギスカンに破壊し尽くされた町をチムールが新しく作り直した。街中至る所に、丸いドーム屋根を持つ回教寺院のモスクと美しい尖塔のミナレット、宗教学校のマドラセがあり、壁や天井を彩るタイルの青と幾何学模様が美しい。が、回教国というのに、ミナレットからは中東のように、目を覚ますほど大きな、礼拝の呼び掛け、アザーンは響かず、モスクにも礼拝の姿はない。音量を大きくしないよう規制しているという。マドラセは多くが土産物屋に姿を変え、シルクロードらしく壁掛やジュウタン等の絹製品、特産の綿を使ったTシャツやバッグ、民族衣装、彫金の壁飾り等、種々雑多な物が売られ、商売熱心な売り子と楽しい？ 駆け引きが続く。

ガイドのドン君は真面目で優秀、真直ぐな眉に大きな目、鼻筋の通った好青年だ。友人から借りたDVDで日本に興味を持ち、独学で短期間に日本語を習得、大学を終えJICAで翻訳の仕事をし、ウズベクで十人余りしかいない日本語ガイドをしているという。観光会社を起し、政治家になり国をよくしたいという25才。そんな彼でさえお祈りも断食もせず、豚肉を食べ、酒も飲む。政教分離のイスラム国家、世俗国家だ。タシケントの駅では皮を剥いだ丸裸の豚を担ぐ男がいた。どこのレストランでも酒が出る。ただビールとワイン、ウォッカくらいで、ビール中ビンが4ドル、ワインがボトルで8ドル程と、この国の所得レベルからすると割高だが、異教徒にも気楽な国だ。

青の都、イスラム世界の宝石の異名を持つサマルカンド。美しいが埃っぽい町。北緯40度と故郷秋田と同緯度の街で、見掛ける花や木は故郷のそれと違わないが、元気がない。最高50度近くまで上がる暑さと、年に十回程しか雨が降らない乾燥した気候にバテバテだ。冬はマイナス40度まで気温が下がり、40センチの積雪があるという。この冬の雪が地下水となり恵みをもたらし、過酷な環境に住む人々を明るく、人懐っこくするのか？ ホテルで結婚式がおこなわれている。3時で仕事が終わる土曜日、明け方まで夜通しパーティーが続く。夕食後、覗いてみる。大音量の音楽に合わせ若者が前列で踊り、思い思いに食べてはお喋り、楽しそう。一緒に飲めと誘われるが、翌朝も旅立ち早い！

立派な灌漑水路と消滅する？ アラル海

青の都サマルカンドから、ティムールの生れ故郷シャフリサブスへバスは走る。灌漑水路が縦横に走り綿の花が白い。ジャガ芋と思ったが綿だという。水の来ない所は雨水に頼り小麦を作る。ソ連時代に国土を挟むアムダリア、シルダリアの二大河川から水を引き、ウズベキスタンは一大綿作地帯になったが、国際規格には合わず、ロシアに売るしかない。加工産業は育っていないという。いびつなモノカルチャ経済の結果、両大河の水はアラル海に届かず、干上がりつつあり、水不足は深刻である。そのためにも二大河の流域の中央アジア五ヶ国がまとまって河川を管理、モノカルチャ経済化され、一国だけではうまく切り盛りするのが難しい五カ国で経済共同体を作れば、バランスの取れた発展ができるのだが、ロシアを向く国、EUを向く国とあり、難しそうだ。

シャフリサブスへの途次並木に桑の木。さすがシルクロード。だが輸出する程はないという。チムールの生まれた町の彼の宮殿アクサライの、彼の銅像前で、純白のウェディングドレスとタキシードの何組もの新婚が練り歩く。ウズベクホールンに景気づけられ、

シャンパン片手の友人達が陽気に続く。昨晚の結婚式でも酒を飲んでいとガイド。気楽なイスラム国家だ！都市部のサラリーマンの平均的月給が4万円程で、高率の関税で守られている国産車大宇（紆余曲折を経て、今はウズベク資本）の最安車が百万円。人口の6割が農業に従事、貧しいながらも食べるには困らないようだが、年率10%程のインフレが更に高進、格差が拡大した時、イスラム原理主義が台頭し、社会が混乱しないか？

1990年のソ連圏の崩壊と91年の中央アジア諸国独立に伴い、ウズベキスタンもソ連から分離・独立。独立時のウズベキスタン共和国カリモフ大統領が、新生ウズベキスタン共和国の大統領に横滑りし、選挙の洗礼を経て、任期9年の大統領職を継続、独裁に近い。遅れた国だから、開発独裁は仕方ないとガイド。社会システムもソ連時代のを多く引き継ぎ、市場経済化途上だ。ソ連時代の教育を受けた高年層と、新体制で教育を受けた若年層の意識のギャップも深いという。ほぼ全員が義務教育を受け、6割が高校へ、3割が大学へ行くというが、大学を出てもいい就職口が少なく、進学率が下がっているという。

砂漠の真ん中にチャイハナ、水不足のオアシスでも泳ぐ！

かってイスラム世界の学術の中心だった、ということは、世界の文化の中心だった古都ブハラで早起きし、通信68号の原稿を叩く。トイレを使い、レバーを押すが流れない！洗面はどうか？水が出ない！夜間給水制限しているのか？水不足が深刻だ。前夜泊まったサマルカンドのプールの水は冷たかったが、キレイだった。地下水を汲み上げ、そのまま使っているのか？震えながら泳いだ。ブハラのプールは小さい上にもう何日も替えていないのだろう、濃い緑だ。泳ぐ気にならない。サマルカンドもそうだが、水道の水も茶色だ。量も質も問題だ。ブハラに二泊、モスクやマドラセ等、世界遺産を巡る

オアシスの町を回る度に砂漠を越え、防砂の葦の植栽を越えて地を這う砂嵐や、野生の口バ、ラクダを初体験する。リスのような小動物や、名も知らぬ小鳥の飛び姿も。不毛に見える砂漠にも、目には見えないが、これらが餌とする花や実をつける植物や昆虫、更にこれらを餌にする猛禽類もいる筈だ。二頭のメスを従え、サンダルを「はいた」口バに哮えられ驚く。誰かが捨てたサンダルに足を突っ込んでしまったのだろう。途中でトイレ等はなく、男女に分かれ、何度も地球大のトイレで用を足す。

ブハラからヒブアへ。道中何もない砂漠に忽然と現れた茶店、チャイハナで昼食。こんな所で洗った野菜や果物はお腹を壊す。サラダとデザートは出ず、発酵させないパンの一種ナンと、そばの玉子焼きのせでビールを楽しむ。砂漠の真ん中だから高いだろうと思いきや、中ビン1本4千スムと意外。ヒブアで一番のリゾート風ホテルの、小振りエメラルドがかったプールで同世代？の仏・伊の紅毛の男女の巨漢に混じり、泳ぐ。男の髪の毛、女の肌の張りは日本人の勝ちだ！と変な優越感を覚える。夜のヒブアの街、二重の城壁に囲まれ丸ごと世界遺産の、城壁博物館都市を散策する。光に淡く浮かぶモスクの青いドームとミナレット、青いタイルと土壁のコンストラストが幻想的だ。

朝顔に釣瓶取られてもらい水？手動でもウオシュレット？は気持ちいい！

翌朝、ヒブアの街を散策。車は進入禁止。昨晚月明りと淡い照明の下で見た青いドーム屋根と高く聳えるミナレットを持つモスク、半ば土産物屋やホテルと化した教場のマドラセは陽の光の下でも美しい。手作りのラクダの毛のスカーフ、コーラン台、麵棒等も売る。

平日と言うのに近在から集まった地元民が日用品を買うバザールは人でごった返し、モウモウと立ち込めるケバブを焼く煙と匂いに包まれ、「外食」を楽しむ。炎天下結婚式を挙げ、広場で音楽を流し踊り誘うが、乗りが悪い。花婿と友人が年だからと、ガイド。両手にバケツ下げ水運ぶ乙女。釣瓶や手押しポンプで井戸から水を汲む。古い句を思い出す。砂嵐が襲い埃だらけでも、湯船に浸かることはなく、週に一度水浴びするくらいという。

広い道をトロリーバスが走り、中層ビルが整然と立ち並ぶ近代的な街、ソ連時代に作られたウルゲンジヘバスは走り、そこから最後の宿泊地タシケントに飛ぶ。最終日、朝ゆっくり起きモスクやマドラセを廻る。地下に大きなお清めの場とキレイなトイレ。手動式ウォシュレット、シャワー水栓付。チップ不要。気持ちいい。トイレは並べてキレイとは言えないが2百から3百スムのチップが要る。最後、市場とソ連時代からの百貨店グムを覗く。三階建てのデパートというよりスーパー。物は豊富だが少し高そう。市場は前日のヒブアと同じくらいの賑わい。道中食べて美味しいと思った干葡萄を土産に買う。

夏は39度、40度の灼熱の世界、雪山と砂漠、オアシスの国、ウズベキスタン。乾いた地に用水路を隈無く張り巡らせ過ぎ、アラル海が干上がりかけるが、農作物に飲ませる水を優先したからか、まだ釣瓶井戸が活躍、ホテルの水も茶色に濁り、お腹を壊す。やっぱり日本がいい。和食と演歌と大和撫子だ！モスクもマドラセも、ウズベクで綺麗な物はみな先人の残した物。現代人が造った「新幹線」が時速70キロ、水道が黄土色、お腹壊す観光客続出では先が思いやられる。25才のガイドが12月に埼玉の人に招待されて来日するというので、皆で一席設けることにしてメーリングリストを作る。

帰国後の仕事帰り、酔っ払って小平に着くと急に土砂降り。折畳傘では防げず、びしょ濡れ。麻昆のスーツで、翌朝見るとクシャクシャ。その朝のNHKで中国の水不足と水質問題を放送。揚子江以西は量はあるが水質悪化が深刻で、進出した日本企業も苦勞。工業用水を再生し循環使用するホンダの工場。翌日は民営化されたマニラの水道事業に進出し、日本の技術を導入、現場に権限委譲しインフラを拡大、2百億円売上げる三菱商事が取り上げられる。●も電源開発の井水利用の専用水道システムの営業を手伝っているが、電発もチマチマと国内で専用水道システムを売るだけでなく、貪欲な外資ファンドの餌食になる前に、水とエネルギー問題解決のために、そのノウハウと資産を有効活用し、世界に貢献できないか？併せて三鷹クラブのネットワークのグローバル展開もできないか？と、土砂降りの雨でデッカチの頭を冷やされ●は考える！？

大同のメラミン牛乳問題・日に320t廃棄！

中国国内で沢山の乳幼児を死に至らしめ、世界中を震撼させたメラミン牛乳問題だが、中国の農村にも深刻な問題を引き起こしている。以下、●も世話人（理事）を務め、山西省大同市で黄土高原の緑化活動を続けるNPO法人、緑の地球ネットワーク（GEN）高見邦雄事務局長の現地からのレポートを転載します。

元共青团書記で、現在農業担当副市長の告向華（告の右側におおざと）に会う。大同ではここ数年、かなりの勢いで乳牛が増えました。豚は穀物を飼料にしないといけないけど、牛は草やトウモロコシの茎などでいいし、役畜としても使えるのでとてもいい。大抵は一戸の農家で1～2頭。1日2回の搾乳時は、蒙牛集団などが経営する飼育場に連れて行き、搾乳器で搾ります。農家で搾ったのでは、衛生面が大きな問題になります。

副市長の話では今は4100頭ほど。そこから1日320トンほどの牛乳が生産されるけど、そのために検査が終了するまでは捨てていると言っていました。そのために、1頭あたり15元の補償を農家にしているそう。市が6元、県が9元。

スーパーの棚からも乳製品が消えてました。ホテルの朝食で毎日食べてたヨーグルトがありません。最近、アルコール飲料を飲まない人達の間で、温めた豆乳を飲むのが流行っています。メラミン以前からのようですが、今回の騒ぎで加速されるでしょう。

GEN(緑の地球ネットワーク)セミナー …「中国の環境問題と日中協力」

2008年10月25日(土)15時~18時

立教大学池袋キャンパス(池袋駅西口)8号館8101教室

コーディネーター 上田信さん(立教大学教授)

パネリスト 加藤千洋さん(朝日新聞編集委員)

山本勲さん(産経新聞編集委員 / 論説委員)

高見邦雄(緑の地球ネットワーク事務局長)

主催:緑の地球ネットワーク 共催:立教大学ESD研究センター

参加費:無料(要予約、氏名 / 連絡先 / 参加人数をご連絡下さい)

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク(GEN)

552-0012 大阪市港区市岡1-4-24 住宅情報ビル5F

tel 06-6576-6181 fax 06-6576-6182

E-mail gentree@s4dion.ne.jp URL <http://homepage3.nifty.com/gentree/>

スーペリア!シンペリア?…夏の軽井沢で爆笑コンペ!

この数年、夏は涼しい所でプレイしようと、能代高校同期の仲間と軽井沢72ゴルフクラブで、☛も下手な「高原ゴルフ」を楽しむ。何故か福島高校出身だが、72の年会費を払う「準会員」の、かつての「学増」のアルバイト仲間、乗換え案内のジョルダン佐藤社長に、今年も8月下旬の土曜に二組予約して貰う。佐藤社長からは10時6分スタート、西コースブルーだと連絡を受ける。80そこそこのスコアで廻る住友不動産の小野寺社長と、社員3百数十人のシステム会社テクノバンの高松オーナー社長の、ベテラン二名のB組はブルー杭スタート、☛のA組は白杭スタートとメンバーに連絡する。

ところが、ティーグラウンドにオレンジのスタート杭はあるが、白杭もブルー杭もない。通常のゴルフ場ではプロがティーショットを打つ目印の杭が一番奥の黒、一般の腕達者が青、一般通常が白、レディースが赤、シニアがゴールドからと距離別に色分けされている。ここでは「一般通常」杭はオレンジ色だ。72の西コースは36ホールあり、それがブルーとゴールドの二つのコースに分かれ、我々はブルーコースでプレイするというので、☛の完全な勘違い。全員大笑いで、オレンジからスタートする。

更にメンバーの一人が、せっかくだからコンペにしよう、それも隠しホールがあって、実力だけでは優勝が決まらない、スーペリア方式でしようと言ってくる。この方式だと集計もゴルフ場がしてくれるので楽だという。たまには目新しいこともいいかと、賛成する。当日スタート前、「スーペリア」方式でコンペをします!と☛が宣言すると、バックツアーのホテルじゃないし、スーペリアじゃないよ、シンペリアだよと、皆が大笑い。高

松君はいつものように84をキープしたのに、笑い過ぎて調子が狂ったか、小野寺君は何時もより10ほど悪い94。それとも社長業が忙しくて、好きなゴルフもままならないのか？気楽な？「独り商社」の●社長は104と、住不小野寺社長を猛追！？

12月3日、三鷹クラブ第二回ゴルフコンペ！

三鷹寮の仲間とは埼玉の小川カントリーをホームコースに、ゴルフを楽しんでいるのだが、10月5日はいつものメンバーの文科省OBの伊勢呂君、農水省OB小畑君の他に、宮脇日本コムシス常務、自治省OB片木早大教授等、42年入寮の多彩な仲間が参加することに。そこで、軽井沢での「勉強」の成果を生かそうと調子に乗って、三鷹クラブの会員に広く呼掛け、小川カントリーでシンペリア方式のコンペをすることにする。

40年入寮で大蔵省OBの宮村前駐ケニア大使や、43年入寮でベンチャーファンドを経営する勝部ナレッジカンパニー会長等も加わり3組。いつもは車の●も、気合を入れ電車に乗る。会費の一部で景品も用意するが、正しくは「新」ペリア方式だということも指摘され、4本用意したニアピン賞は1人、2本のドラコンも1人だけ、三鷹クラブのレベル？の反映。当日メナード化粧品品の役員も務める勝部君が高価化粧品を賞品に持参、顧問先の因幡電機の中澤部長からも賞品のカンパがあり、楽しく盛り上がる。

好評に応え？二回目は12月3日(水)にしました。第一回は休日で、期日にも余裕がなかったので、二回目は二ヶ月前から予約でき、リタイアされた方が参加しやすい平日にしました。宮村先輩は「同じ寮だと、初めての仲間でも直ぐ親しくなれて、楽しいね！」ということです。できれば「定例懇談会」に続く三鷹クラブの交流の場として、育てていければと思います。昔から、三鷹寮と三鷹クラブはオープンな組織で、講演会もカップルのみならず、外部の方の参加も結構あります。奥さんやお子さん、お知り合いの方とでも結構ですので、奮ってご参加下さい。「仲間の仲間はみな仲間」です。

小川カントリークラブ(049-372-1515、詳細はネットで)は池袋から東武線快速急行で一時間の小川駅からクラブバスで10分、バスは頻繁にあります。12月のビジタープレイ費は乗用カート利用、キャディなし、食事別で1万千円、打ち上げ後の懇親会の費用を入れても1万5千円で上がると思います。スタートが8時50分予定なので、8時15分集合で願います。申込みは10月中に●事務所まで、メール又は、ファックスで、願います。

アメリカ大統領の戦争・・・東大三鷹クラブ第81回定例懇談会

「そうだったのか！アメリカ」という本がある。(NHK『週間子供ニュース』のお父さん役だった記者の池上彰著)アメリカは、「宗教国家」「連合国家」「民主主義の帝国」「銃を持つ自由の国」「裁判から見える」「移民の国」「差別と戦ってきた国」「世界経済を支配する国」「メディア大国」だとして、いろいろな側面から解説している。もうひとつ付け加えるなら、「常に戦争してきた国」であり、その戦争の最高司令官は大統領であり、その大統領の存在ほどアメリカ民主主義を特徴付けるものはないということだろう。アメリカ在住の永かった内田義雄氏が「戦争指揮官リンカーン～アメリカ大統領の戦争～(文春新書)」を上梓したのが、昨年3月20日だったが、まさに「そうだったのか！アメリカの大統領、アメリカの戦争」と私の目を開かせてくれたのがこの本だった。

50年前の三鷹寮時代、オリーブ会で一緒に議論した内田氏と再会したのは、カザフ問題でご意見を伺いたく、NHKエンタープライズ・アメリカ社長（NY）を辞して、NHKクリエイティブ専務取締役役に就任して間もない1992年だったと思う。それ以来、三鷹クラブの会合に時々顔を出していた内田氏は、「聖地ソロフキの悲劇～ラーゲリの知られざる歴史をたどる～」（NHK出版）「自壊するアメリカ」（9・11テロ後の世界、筑摩新書、共著）等を出版している。今回は11月4日の大統領選挙直前という絶妙なタイミングであり、アメリカは変わるのか、アフガニスタンやイラクの戦争はどうなるのか、に大きな関心が高まっているが、リンカーンを原型とする「アメリカ大統領の戦争」という視点は、是非とも知っておきたいテーマである。

内田氏は、新潟県長岡市出身、県立三条高校卒、東大文学部西洋史学科を卒業後、NHK入社、報道プロデューサーとして中東やベトナム戦争、そして米ソ両国を取材し数々の特集番組を制作してきた。作品に「アラブの世界」「サイゴンの浮浪児たち」「三人の未帰還兵」「ニューヨーク危機」「グランドキャニオン」「ホワイトハウス」「石油：知られざる技術帝国」「日本の条件（外交）」「だれがロシアを救うのか」等がある。現在は大正大学非常勤講師を勤めるかたわら、「アメリカ・魂のふるさと」（アメリカ50ヶ所の旅、BSやTVジャパンで放送）等をプロデュースしている。

アメリカ在住経験者は、三鷹クラブ会員にも多数いると思うが、アメリカ大統領選挙の直前、講師の話をもとに侃侃諤々の議論が期待される。（文責秋山順一 昭和33年入寮）

日 時：平成20年10月30日（木） 18時30分～21時（二次会あり）

場 所：学士会館本館203号室（千代田区神田錦町3-28 03-3292-5931）

講 師：内田義雄 元NHKエグゼクティブ・プロデューサー（昭和33年入寮）

会 費：5000円（会場費、夕食代・ビール代、通信費など込み）

申込先：平賀・干場 Fax 03-5689-8192 電話 03-5689-8182

（有）ティエフネットワーク Email: tfn-hoshiba@blue.ocn.ne.jp

「脳と老化」・・・12月6日、恒例の「東大三鷹国際学生宿舎生と三鷹市民の集い」

10月12日（日）夕方、三鷹寮の留学生入寮歓迎会に1年上の辰紘先輩、95年入寮で、国会図書館で働く三野功晴君の3人で参加。7月の送別会と同じように、花小金井駅の魚力で4人前のパーティ寿司を10桶と巻物をサービスで握ってもらい、車で持参。帰りは代行に運転してもらおうが、吉祥寺駅ビルで握って貰い、タクシーを探してウロウロするより、随分楽だ。寮生の手作り焼ソバ、おでん、白玉のデザートと寿司で交流後、いつものようにファミレス華屋与平衡で世話役の労をねぎらう。20名の中に、アメリカでの生活も長い新顔の中国人留学生もいて、和食は美味しいと沢山食べてくれる。

大学の職員も顔を出し、今年の「三鷹宿舎生と市民の集い」の講師は教養学部の石浦章一先生で、演題は「脳と老化」だという。開会は11時で、講演後懇親会もあります。読者には興味のあるテーマと思います。OBに限らず、奮ってご参加下さい！

「通信」に癌のこと書かなくなれば完治だよ！（再見！）

河野信博三楽病院名誉院長（S30年入寮）のお言葉ですが、これで正真正銘の完治？